

簡明婦人病論

安藤正胤譯

一



k 46

富士川文庫



495.1

Ka

1

F 1
カ-112

4冊

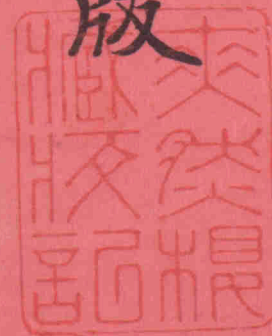
4951
Ka
1

No. 2527
12 K 46

米國斯密私氏著
日本安藤正胤譯

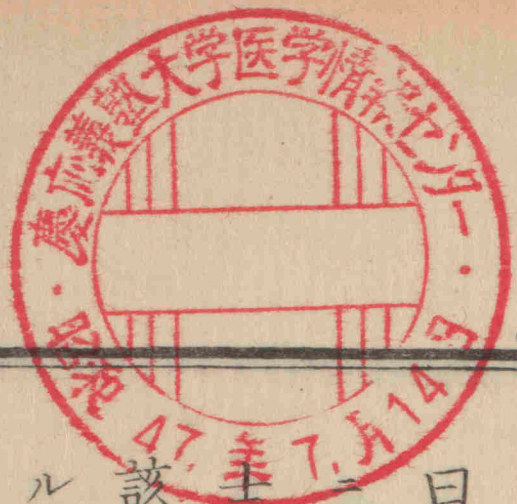
簡明婦人病論

東京 爽然樓藏版



簡明婦人病論小引

近時醫書ノ纂譯スル者陸續梓ニ上ル曰ク内科
曰ク外科而ノ婦人科獨リ其書ニ乏シ世ノ刀圭
ニ從事スルモノ常ニ以テ憾ト為ス余頃米國醫
士斯密私氏著ス所婦人病論一卷ヲ得タリ此レ
該科緊要ノ諸說ヲ蒐集シ極メテ簡明ニ論述ス
ルモノニメ輓今歐米諸州ニ於テ婦人病診法及
ヒ治療ノ面目ヲ改新スルノ一斑ヲ窺フニ足ル
余欣賞措カス隨テ讀ミ隨テ譯シ遂ニ數冊ヲ成
ス因テ之ヲ江湖ノ諸彦ニ頒チ聊世ニ裨益スル



富士川文庫

3151

簡明婦人病論

卷一 小引

爽然樓藏版

所アラント欲ス余ヤ淺陋加フルニ醫務繁冗未
タ之ヲ訂正スル遑アラス直チニ削刷ニ付ス讀
者幸ヒニ字句ノ拙劣ヲ咎ムル勿レ

明治十二年四月爽然樓ニ識ス

安藤正胤



緒言 節譯

女子ノ生殖機ハ全身諸機發生ノ中樞ニシテ其
生活及ヒ諸器ノ裝置ヲ主宰スル所ノ者ナリ
動物界ニ於テ男子ハ凡百ノ事務ヲ管理スルノ
責任アルニ由テ造化特ニ之ニ授與スルニ強健
及ヒ才能ヲ以テス而シテ男子ノ生殖器ハ本體ノ
外部ニ位シ單ニ之カ附屬物タルニ過キス故ニ
之ヲ除去スルト雖モ其形姿ノ平均ヲ失フモノ
ニ非ス之ニ反シテ女子ニ於テハ植物界ノ如ク
其生殖器ハ全體造構ノ基礎ヲナス者ナリ

動植二門ノ中孰レヲ問ハス雌ハ特ニ雄ヨリ受
クル所ノ妙機ニ由テ其卵子ヲ發育シテ成熟期
ニ至リ遂ニ完全ナル一體トナシテ之ヲ産成シ
以テ其種族ヲ連綿増殖セシムル者タリ
凡ソ男子ノ患フル所ノ疾病ハ女子ニモ亦之
リト雖氏女子ニ特有セル一種ノ生殖器病即チ
其器質的若クハ官能的ノ變化ヲ來タシ男子ノ
疾病ニ比似ス可カラサルノ狀ヲ呈シ以テ其全
身ヲ侵スヲアリ之ヲ驅除スルニハ特別ノ方法
無ル可カラス此レ五十年來婦人病學ノ一科興

レル所以ナリ

簡明婦人病論卷之一目次

緒言

第一編

診斷法

第一病症ノ履歷

第二理學的ノ診斷

觸診視診聽診ノ表

觸診

第一直達觸診

〔三〕腔腔單純指診

〔三〕直腸單純指診

〔三〕重複觸診

〔四〕聯合檢查

〔五〕按腹

第二迴達觸診

〔二〕子宮消息子

〔三〕膀胱消息子

〔三〕檢溫器

視診

第一直達視診

〔一〕點檢

〔三〕子宮鏡

〔三〕洩液器

第二迴達視診

顯微鏡

聽診

第一迴達聽診

成音 聽胸器

第二直達聽診

發音

第二編

全身病

〔二〕徽毒

〔三〕癌腫

〔三〕肺病

第三編

局所病

卵巢諸病

〔一〕炎

〔三〕出血

〔五〕肥大

〔七〕纖維腫

〔九〕轉位

〔十〕不具

第四編

〔三〕膿瘡

〔四〕萎縮

〔六〕癌腫

〔八〕囊腫

〔十〕歇爾尼亞

喇叭管諸病

〔一〕炎

〔三〕水腫

〔五〕癌腫

第五編

廣韌帶諸病

〔一〕炎

〔二〕骨盤內腹膜炎
〔三〕骨盤內蜂窠織炎

〔三〕囊腫

〔五〕腹膜內出血

第六編

〔二〕膿瘡

〔四〕狹窄〔閉塞〕

〔二〕膿瘡

〔四〕腹膜外出血

子宮諸病 不孕

〔一〕加答爾 內膜炎

〔四〕潰瘍

〔六〕膿瘡

〔八〕子宮外孔狹窄

〔十〕肥大

〔十二〕萎縮

〔十四〕癌腫

〔十五〕纖維腫

〔二〕炎 〔甲〕子宮實質炎 〔乙〕子宮內膜炎 〔丙〕子宮頸

〔三〕顆粒性炎

〔五〕侵蝕性潰瘍

〔七〕子宮膀胱瘻瘡

〔九〕子宮內孔狹窄

〔十一〕子宮肥大 〔延長〕

〔十三〕不具

〔甲〕硬性癌 〔乙〕陷沒性癌 〔丙〕萌芽狀癌 〔丁〕內皮癌 〔戊〕翻花狀癌

〔甲〕腹膜下纖維腫 〔乙〕纖維腫 〔丙〕子宮壁纖維腫 〔丁〕纖維性囊腫 〔戊〕瘰肉

〔十六〕蜂巢織 ／ 新生肥大

〔十七〕轉位 〔甲〕前轉 〔乙〕後轉 〔丙〕脫出

第七編

腔諸病

〔一〕加答爾

〔三〕膿瘡

〔五〕膀胱腔瘻瘡

〔七〕膀胱歇爾尼亞

〔九〕小腸歇爾尼亞

〔十一〕囊腫

〔十七〕粘膜瘰肉

〔十八〕屈撓 〔甲〕前屈 〔乙〕後屈 〔丙〕橫屈 〔丁〕翻轉

〔二〕炎 〔淋病〕

〔四〕癰痕

〔六〕直腸腔瘻瘡

〔八〕直腸歇爾尼亞

〔十〕癌腫

〔十二〕瘰肉

〔三〕破裂〔產婦〕

〔五〕腔壁攣縮

第八編

陰門諸病

〔一〕大陰唇炎及膿瘡

〔三〕浮腫

〔五〕小陰唇肥大

〔七〕鎖陰

〔九〕陰唇靜脈瘤

〔十〕癌腫

〔五〕狹窄

〔十〕瘰癧

〔八〕瘰癧

〔六〕瘰癧

〔二〕痒痛

〔四〕大陰唇肥大

〔六〕挺孔肥大

〔八〕處女膜無孔

〔十〕黴毒

〔三〕尿道脈管腫

〔三〕囊腫

〔五〕潰瘍

第九編

〔一〕乳房諸病

〔一〕炎〔甲〕蜂窠織及乳頭
〔乙〕乳房炎

〔三〕乳汁過溢

〔五〕萎縮

〔七〕乳頭罅裂

〔九〕慢性乳房腫瘍

第十編

〔五〕昆實碌末答

〔五〕昆實碌末答

〔二〕膿瘡〔產婦〕

〔四〕肥大

〔六〕乳頭陷沒

〔八〕癌腫

〔十〕囊腫

官能的諸病

〔一〕月經閉止

〔二〕月經貧少

〔三〕萎黃病

〔四〕月經過溢

〔五〕子宮出血

〔六〕月經轉換

〔七〕月經痛

〔八〕交接痛

〔九〕不孕

〔十〕歇私的利

〔十一〕色欲亢盛

〔十二〕色欲缺乏

第十一編

妊娠併發諸病

〔一〕尿利失禁

〔三〕尿閉

〔三〕子宮外妊娠

〔四〕塊孕
グモールプレ

〔五〕陰唇及腔靜脈瘤

〔六〕墮胎

第十二編

分娩併發諸病

〔一〕子宮無力

〔二〕子宮孔緊張

〔三〕會陰緊張

〔四〕出血
〔甲〕意想外ノ出血
〔乙〕不可免ノ出血

分娩繼發諸病

〔一〕蓐熱

〔二〕產蓐腐敗熱

〔三〕產後子宮炎

〔四〕產後腹膜炎

〔五〕產後骨盤內蜂窠織炎
〔六〕會陰破裂

婦人病論卷之一

〔七〕子宮破裂

〔八〕陰破裂

〔九〕產後白腫

〔十〕英勃利私謨

〔十一〕出血

〔甲〕分娩第三期ノ出血

〔乙〕分娩第三期ノ後

〔丙〕

輸血法

〔十二〕

〔十三〕

〔十四〕

〔十五〕

〔十六〕

〔十七〕

〔十八〕

〔十九〕

〔二十〕

〔二十一〕

〔二十二〕

〔二十三〕

〔二十四〕

〔二十五〕

簡明婦人病論卷之一

米國 斯密私氏 著

日本 安藤正胤 譯

第一編

診斷法

凡ノ疾病ニ於テ精細ナル診斷ヲ得ント欲セハ
須ク左ノ二項ニ由ル可シ第一既往ヲ訊問シテ
疾病ノ自覺症ヲ辨明シ第二理學的診斷ニ就テ
其他覺症ヲ鑒察スル是レナリ

〔第一病症ノ履歷〕

診斷ニ緊要ナル既往ノ患狀ヲ



簡明婦人病論 卷一 安藤正胤 著

訊問スルニ自カラ順序アリト雖モ未タ必ラス
シモ其順序ヲ踐ムヲ要セス固ヨリ臨機應變ノ
所置ナカル可ラサルナリ先ツ病者現在ノ所患
ヲ問フ可シ例之ハ疼痛ノ有無感覺或ハ平常ト
異ナル模様ヲ問ヒ從テ病症ノ履歷ニ及フ其初
メテ侵サル、時ノ景況月經ノ時期或ハ經過ノ
日數其既往ノ所患或ハ稟賦ノ強弱及ヒ遺傳卽
チ父母ノ體質或ハ其死亡スル者ハ何的ノ病症
ニ因スルヤヲ知得スルハ醫家ノ須要トスル所
ナリ又此尋問ノ際ニ於テ患者ノ容貌音調及ヒ

性質ニ注意シ且ツ其病症ニ關涉スル所ノ要件
ヲ顧慮セサル可ラス

第二理學的診斷 諸般ノ病症ヲ診斷スルニハ宜

シク五官ヲ用フ可シ而ノ觸診視診聽診ヲ緊要
トス特ニ觸診ノ如キハ婦人科ニ於テ缺ク可ラ
サル者ナリ今學者ヲシテ觸診ノ方法ヲ了解セ
シメン為メニ簡易ナル表ヲ製シ之ヲ左ニ掲ク
觸診ニ直達廻達ノ二法アリ其直達觸診ヲ數般
ニ區別ス

〔其一單純觸診〕ハ單ニ脛或ハ直腸ヲ觸診スルカ

觸診之表

直達

單純觸診

（直腸）

如レ其二重

重複觸診

複觸診ハ同

聯合檢查

時ニ直腸及

按腹

ヒ腔ヲ檢查

スルカ如シ

廻達

消息子

（子宮膀胱）

（其三聯合檢

驗溫器

查ハ一手ヲ

以テ外部ヨ

リ按腹ヲ施シ一手ハ内部ヨリ檢查スルカ如シ

其四按腹ハ腹部ノ感覺及ヒ波動ノ發生何如ヲ

視診之表

直達

點檢

腸内ヨリ指端ヲ以テ

子宮鏡

之ヲ觸知スルカ如キ

洩液器

是レナリ其二驗溫器

ハ廻達觸診ノ器械ニ

廻達

顯微鏡

屬スルハ體溫ヲ檢ス

ルニ方ツテ單ニ觸感

ニ憑ルキハ往々誤謬ナキヲ得ス故ニ此器ヲ用
スレハ其精計ヲ得レハナリ

直達視診ニ三アリ第一點檢トハ腹部形狀ノ不

聽

迴達成音

妊娠時ノ血行

妊母

纖維腫ノ血行

胎兒

診

聽

捻髮音

表

直達發音

直達

打診法

迴達

整第二子宮鏡ヲ用井テ子宮頸ノ狀ヲ窺ヒ第三

洩液器ヲ以テ腫瘍ノ含蓄物ヲ驗スルヲ云フ顯

微鏡ハ迴達視診器ニシテ病的新生物ノ性質ヲ

照明ニスルニ使用スル者ナリ

聽診ニ於テ鑒識ヲ得ント欲セハ迴達ニ聽診器

ヲ用井テ子宮及ヒ腹内諸臟ノ音響ヲ聽取シ或

ハ直達若シクハ迴達ノ打診法ニ由テ其發音ヲ

聞ク可シ

以上記載セル諸般ノ診斷法ヲ反覆シテ尚ホ詳

細ニ論述セント欲ス語頗ル多岐ニ涉ルト雖凡

學者他日之ヲ實際ニ施シ婦人ノ疾病ヲ診斷ス
ルキハ其裨益少トセス

觸診

第一直達觸診

其一腔腔單純指診 指診ヲ施スニ當テ先ツ右
手ノ示指指兩指ニ大差アルキハ中ニ油類ヲ塗布
ス可シ之ヲ塗布スルハ元ト容易ナリト雖凡宜
シク注意スヘキナリ故ニ先ツ指ヲ油ニ浸シ將
サニ之ヲ腔中ニ送入セントスルノ時ニ至ルマ
テ屈折シテ手掌ノ中ニ抱擁ス可シ而ノ其油類

ニ種々アリ家猪脂、虞里斯林、宓斯林、橄欖油、及ヒ
グリーンホル氏ノ複方油軟石鹼ニミル虞里斯林ニ
石炭酸一ミル酒精三ミル
者ノ等是レナリ就中橄欖油ハ指ヲ粘滑ナラシム
ルニ最モ良品ナリ之ヲ虞里斯林ニ較フレハ粘
着性少ク又家猪脂ハ塗擦ノ時間久シキヲ要ス
ルノ弊アリ此レ病院ノ實驗ニ係ル所ニメ最モ
確信ス可キ者ナリ凡テ油類ヲ以テ指ヲ粘滑ナ
ラシムルノ利益ニ於テハ左ノ二般アリ即チ一
ハ指ヲ患者ノ腔内ニ送ルニ當テ軟鬆ナル小陰
唇ヲ内部ニ強ク壓入シテ疼痛ヲ起スカ如キ患

ヲ避ク一ハ該部ノ排泄物ヲ檢者ノ指ニ浸潤ス
ルヲ豫防シ得ルナリ指診ヲ施スニ當テ患者ノ
腰部ハ衣類ヲ以テ被包シ其膝ヲ上舉シ以テ左
側ニ卧セシメ而シテ檢者ハ患者ノ稍後方ニ立チ
左手ヲ患者ノ右髖骨ニ安排スヘシ是レ別ニ意
ヲ留メサルモ自ラ腔孔ヲ窺ヒ得ヘキ位置ナリ
指ハ可及的挺孔及ヒ其近傍ニ於ケル感覺銳敏
ノ部分ニ觸接セサルヲ要ス故ニ陰門ノ後縫結
部ヨリ子宮孔ニ達スルマテ腔ノ後壁ニ沿フテ
徐々ニ進入セシム可シ又妊婦ヲ診斷スルニ若

シ子宮孔ノ位置高ク後方ニ在ルキハ左手ノ指
ヲ以テ容易ク之ニ達スルヲ得ヘシ且ツ左指
ヲ用フル利益ハ子宮孔ニ觸ル、ニ爪甲ヲ觸レ
スシテ指掌ノ觸ル、ヲ以テナリ是レ指掌ノ感
覺ノ優ルニ由ルナリ
左右兩手ヲシテ觸診ニ熟セシムルキハ大ニ益
スル所アリ故ニ屢患者ヲレテ右側ニ卧セシメ
左手ヲ以テ檢查ヲ試ム可シ而シテ左手ノ觸診ヲ
適實ナラシムルニハ宜シク意思ノ熟練ヲ要ス
ルヲ猶ホ顯微鏡ヲ用井ルニ兩眼ヲ等シク慣レ

シムルカ如シ外科術者ノ如キハ兩手共ニ利ス
ルハ最モ肝要ノ者ナリ
指ノ既ニ子宮孔ニ達スルヤ先ツ形狀方向大小
廣狹及ヒ子宮頸ノ位置大小形狀硬軟及ヒ感覺
ノ銳面其他瘰肉或ハ新生物ノ有無又之ヲ壓シ
テ其知覺ノ如何等ヲ診查ス可シ從テ子宮頸ノ
前面ニ沿フテ指ヲ送入セシメ其前屈症ヲ徵ス
ル所ノ小溝、妊娠ヲ徵スル所ノ前壁ノ膨大子宮
内外ノ腫脹及ヒ膀胱結石ノ有無ヲ檢シ而後チ
後盲囊部ニ移リ腫脹ノ有無直腸ノ形狀ヲ探リ

次ニ側盲囊ニ到リ左右共ニ卵巢ニ達スルヤ知
覺銳敏ナルヤ或ハ該部若シクハ子宮外孔ニ方
テ異形ノ腫脹ヲ有スルヤヲ檢査シ終ルマテハ
指ヲ腔ヨリ出スヲ勿レ

其二直腸單純指診 直腸ノ内痔瘰肉及ヒ裂傷
ノ有無又或ルキハ後屈症ニ於ケル子宮底ノ位
置其後壁ノ形狀卵巢ノ占地薦骨前面ノ形狀等
ノ檢査ヲ助ケルノ診法ナリ

指ニ油類ヲ塗布スルニ先テ指尖ニテ石鹼ヲ搔
爬シ指頭ト爪甲ノ間ニ充填シ間隙ナカラシム

可シ然ル片ハ有害ナル汚物ヲシテ檢者及ヒ後
番ニ檢ス可キ患者ニ移轉セシムルナシ

〔其三重複觸診〕 子宮後屈症子宮後部ノ纖維腫
及ヒ子宮直腸ノ血囊腫等ニ於テ直腸腔囊ノ檢
査ニ甚タ肝要ナリ此觸診ハ諸家各其方法ヲ異
ニス或ハ一手ノ示指ヲ腔ニ他手ノ示指ヲ直腸
ニ送入スルアリ又ドクトル、チルト氏ハ一手ノ
示指ヲ腔ニ拇指ヲ直腸ニ送入ス又或ハ一手ノ
示指ヲ腔ニ其中指ヲ直腸ニ送入スルアリ蓋シ
第一法ハ未タ善良ノ法ト云フ可ラス此診斷ニ

兩指ヲ使用スル片ハ互ニ妨碍ヲナシ且ツ其二
指尖相互ノ位置ヲ占ルニ及テ鑑定上ニ甚タ困
難ヲ生スレハナリ何トナレハ兩手指神經ノ起
幹甚タ遠隔ナルカ故ニ兩手ニ示指間ニ保ツ所
ノ腫瘍ノ大小位置等ヲ速ニ且ツ精細ニ鑒識ス
ル能ハサレハナリ第二法ハ稍善良ナリ是レ其
神經ハ手掌ニ於テ分歧シ起幹短キカ故ニ兩指
間ノ距離ヲ分別スルナリ前法ニ比スレハ容易ナ
リト雖ヒ一ノ不便ハ兩指ノ長短ニ大差アルヲ
以テナリ第三法ハ以上ノ障礙ナク加之其精密

ナルニ於テハ最上トス可キナリ何トナレハ中
 央神經ノ手掌ニ於テ指枝ニ分岐スル其第一
 第二枝ハ拇指ニ分佈シ第三枝ハ示指ノ橈骨側
 ニ分佈ス第四枝ノ一枝ハ後チニ岐レテ示指ト
 中指ノ隣接側ニ分佈ス故ニ此二指神經ノ分佈
 ハ最モ親密ニシテ此觸感ヲ辨識スルヲ速ニ且
 ツ二指ノ間ニ保ツ所ノ物體ヲ詳細ニ了解シ得
 レハナリ

〔其四聯合検査〕

骨盤諸器ノ位置關係或ハ腫瘍
 ノ骨盤及ヒ腹部ニ生シテ骨盤内諸器ノ一部若

シクハ全體ニ關係スル位置等ノ診斷ニ最モ肝
 要ノ法ナリ此法ヲ施ニハ患者ノ膝ヲ上舉シテ
 仰臥セシメ檢者ハ常ニ左手ヲ下腹部ニ安排シ
 而シテ右手ノ指ヲ腔内ニ送入スヘシ如此スル
 キハ能ク子宮ノ側方轉位ヲ速ニ檢出シ且ツ子
 宮ノ高低ヲ認定シ得可シ又下腹部ヲ緊ク觸壓
 シテ子宮ノ増大ヲ知リ又腹部或ハ骨盤ニ腫瘍
 ヲ生シテ子宮上ニ連接スルヲアレハ其景況ヲ
 知リ且ツ其腫瘍ノ大サハ多クハ兩手ノ間ニ於
 テ量リ得ヘシ又此法ヲ以テ一ノ腫瘍ノ子宮全

體若シクハ一部ニ連及スルヤ否ヤヲ診斷スル
ヲ得ヘシ例之ハ卵巢腫瘍ニ於ケルカ如シ
〔其五按腹〕 此法ヲ行フニ方ツテハ先ツ患者ヲ
シテ仰臥シ膝ヲ上舉シテ腹部ヲ露サシム可シ
粗漏ナル診察ニ於テハ一片ノ薄衣ヲ隔ツルモ
妨ケナシト雖凡今腫瘍ノ形狀硬軟大小移動及
ヒ蓄液ノ有無ヲ精密ニ檢查スル時ニ於テハ必
ス全腹ヲ露出セサル可ラス先ツ細心注意シテ
兩手一齊ニ下部ヨリ上部ニ向フテ按壓シ手下
ニ現出スル所ノ腫瘍ノ形狀及ヒ大小ヲ測リ而

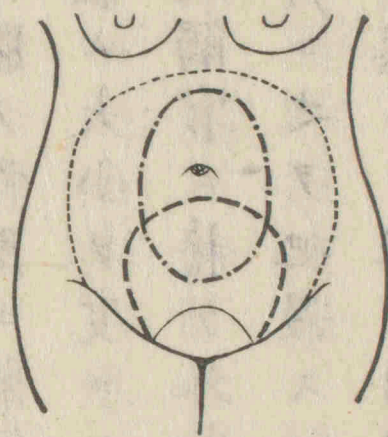
ノ之ヲ把握シ其移動或ハ固定ノ景況ヲ診定シ
次テ打診ヲ行ヒ蓄液ノ有無ヲ檢查シ若シ其液
稠厚ナラサルハ手掌ヲ平ニシテ腫瘍ノ一側
ニ貼シ他側ヲ打試ス可シ即チ此法ハ示指ヲ中
指ノ上ニ置キ速ニ滑動セシメテ腹壁ヲ打敲ス
ルハ波動ヲ生シテ他手ニ感衝スルカ故ニ容
易ニ之ヲ辨明シ得ヘシ然リト雖凡若シ蓄液ノ
稍稠厚ナルカ或ハ多少緊張セル數箇ノ小囊中
ニ在ルハ腫瘍ノ兩側ニ兩手ノ指端ヲ置キ其
手指ヲ以テ強ク且ツ速ニ壓スルハ他指ニ外

部ヨリ來ル壓力ノ感覺ヲ生ス此レ秤水學ノ法
 則ニ由テ液ノ有無ヲ證スル者ナリ又波動不分
 明ニシテ恰モ脂胞瘤ニ疑ハシキヲアリ然ルキ
 ハ介者ノ手ヲ以テ檢者兩手ノ間ノ腹壁ヲ壓迫
 セシムルニ若シ眞ニ蓄液アルキハ必ス波動ヲ
 生ス可シ然ルニ固形瘤ニ於テハ之ニ似タルノ
 感覺アルモ此法ヲ用井ルキハ眞ノ波動ヲ生セ
 サルニ因テ明ラカニ識別ス可シ
 内部ノ觸診ニ於テハ凡テ抵觸スル所ノ物體ハ
 必ス眞形ヨリモ大ナル者ト精神上ニ臆想ヲ生

スルヲ常トス抑モ物體ノ大小ヲ比較スルニ當
 テ精神ニ起ル所ノ感覺ハ神經ノ勢力ニ由テ發
 シタル腦ノ作用ニ關係スル者タリ今視官ニ於
 テ物體ノ大小ヲ度ルニ唯眼ノ小運動ヲ要スル
 ノミ又觸官ニ藉テ外物ヲ定量スルニ於テモ數
 指一齊ニ之ヲ把握スルカ故ニ亦小運動ヲ要ス
 ルノミ然リト雖モ内部ノ觸診ニ於テハ手指ヲ
 腫瘍ノ周圍ニ繞摸セシムルカ故ニ精神ハ唯其
 運動ノ容積ニ由リテ其大小ヲ了解スルモノタ
 レハ費消セシ神經力ノ比例ヲ以テ其眞形ヨリ

倍大シテ想像ヲ發スルモノナリ

第一圖



膨大セル膀胱
妊娠四月至五
月ノ子宮
子宮ノ纖維腫
妊五ノ子宮
月ノ子宮
卵巣ノ腫瘍妊
娠八月至九月
ノ子宮
腹水ニ於ケル
反響ノ面

第二廻達觸診

其子宮消息子

此器械ハ指診ノ達シ難キ部

ニ使用スル所ノ者ナリ

其造構ハ純銀或ハ銀ヲ

鍍セル銅ヲ以テ製作シ

其意ノ如ク撓屈スルヲ

要スル所以ハ其部ニ適

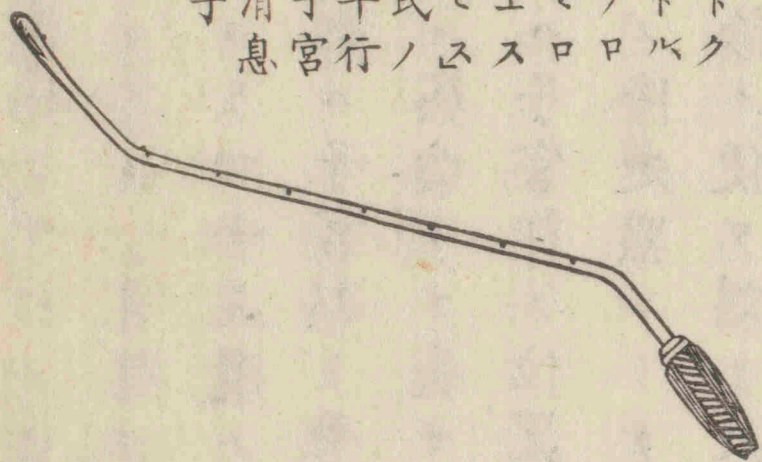
應セサルヨリ子宮ヲ強

壓シテ損傷ヲ生スルヲ

防クカ為メナリ其一端

第二圖

トドクハプロセエミ氏ノ平子宮消息子

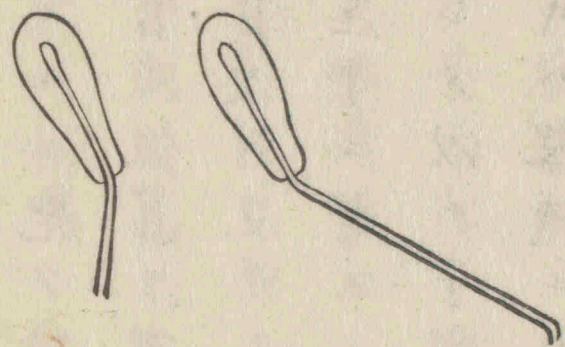


ニハ小手柄アリ杆ノ口徑ハ細小ナリ尖端ハ橄欖狀ニシテ其子宮部ハ長サニ「インチ」半ニシテ直線部ヨリ四十五度ノ角ニ屈曲ス他ノ一端即チ手柄部ハ子宮部ト平行ナルヲ要スルカ故ニ同角度ニ屈曲シテ長サニ「インチ」ナリ此手柄部ノ位置ハ子宮部ノ位置ヲ指示ス且ツ角ノ内面ニ細小ノ隆起點アリテ其子宮部ヲ限界ス而ノ尚ホ指診ノ便ヲ謀リ此點ヨリシテ每一「インチ」ニ標點ヲ刻ス此消息子ハ「ドクトル」プロセロエス「ス」氏ノ發明シテ世ニ公スル所ナリ此器械

ヲ使用スルニ先ツ指診ヲ施シ消息子ノ經過ス可キ子宮ノ位置ヲ認メ患者ヲ左側ニ卧セシメ檢者ハ其後ニ立チ而ノ示指ノ尖端ヲ子宮後部ニ置キ左手ニ有スル消息子ヲ其指掌ニ對シテ經過セシメ以テ子宮孔ニ向ハシム子宮常位ヲ占ムルハ器械ニ力ヲ用井ル「ナク」徐々ニ上方ニ進メテ子宮部ノ尖端ノ子宮孔ニ達スルマテ送入セシム可シ從テ猶ホ障礙ヲ覺ヘサルハ一層注意シテ深ク之ヲ進メ其尖端子宮底ニ抵リ患者ノ臍部ニ疼痛ヲ訴フルニ及テ止ム可

此レ已ニ子宮底ニ達スルノ徴ナリ初メ検査ス
ルニ子宮ノ後轉ヲ確認セハ消息子ノ尖端ヲ後
方ニ向テ送入ス而ノ子宮尋常ノ行徑ナル片ハ
消息子ノ廻轉ヲ示ス

第三圖



二、インチ半ヲ超過ス
可カラス今子宮ヲ本
位ニ復サシメント欲
セハ手柄ヲ半圓形ニ
廻轉セシム可シ即チ
子宮部ノ軸ニテ廻轉
セシメ而ノ後チニ手

柄ヲ下後方ニ押スハ子宮ハ自カラ本位ニ復
ス可シ若シ然ラスシテ手柄ノ軸ニテ半圓形ニ
廻轉スルハ子宮部ハ子宮内ニ於テ半圓錐形
ニ旋廻シ以テ子宮ニ疼痛ヲ發シ或ハ損傷ヲ被
ラシムルコトアリ宜シク注意スヘキナリ
子宮消息子ノ廻達觸診ハ子宮腔ノ長短及ヒ形
狀ノ整歪及ヒ本然ノ角度ヨリ其位置ニ幾許ノ
差異アルヤヲ測定シ或ハ子宮ノ前部或ハ後部
ノ腫脹ヨリ發スル子宮底ノ屈撓及ヒ子宮腔一
部ノ閉塞即チ新生物ノ有無ヲ検査スルニ於テ

裨益少ナカラス然リト雖モ消息子ヲ使用スル
ニハ最モ緩徐ナルヲ要シ子宮ヲ經過スルニ消
息子自己ノ行路ニ任セサル可カラス
〔其二膀胱消息子〕此器械ハ膀胱ノ結石或ハ病
的新生物ノ有無ヲ検査シ又或ルキハ膀胱ノ子
宮頸前面ニ下垂スルノ度ヲ鑑定スルニ用フ直
達廻達ノ聯合觸診ハ甲ハ按腹ト子宮消息子ヲ
用井乙ハ腔或ハ直腸ノ検査ニ膀胱消息子ヲ用
子宮内ニ消息子ヲ送入シテ按腹スルニ腹部ニ

腫瘍ノ存スルアリテ此消息子ヲ動搖セシムル
ヤ否ヤヲ決定シ又消息子ノ膀胱中ニ在ルキハ
腔内ノ検査ニ因テ其尖端ノ位置ヲ搜知シ又直
腸ヨリ檢スルキハ子宮不具ヲ診決ス可シ

〔其三驗溫器〕此レ廻達觸診器ニノ體溫ノ確度

ヲ計リ得ンカ為メニ使用スル所ノ者ナリ若シ
此器ヲ用井ス唯觸壓ニ由テ檢スルキハ其手掌
ノ溫度常ニ變化アルカ為メ大ニ謬誤ヲ来タス
可シ故ニ其精覈ヲ得ント欲セハ必ス此器ナカ
ル可ラス而シテ口内、腋下、腔、直腸或ハ子宮内ニ於

テ檢ス可シ口内ニ於テスルニハ此器ノ球部ヲ
舌下ノ一側ニ挿ミ口唇ヲ緊閉ス可シ若シ空氣
ノ流通スルキハ大ニ謬計ヲ得レハナリ而シテ
三分時間口内ニ留ム可シ腋下ニ於テハ球部ヲ
腋下ノ上部ニ狹ミ全器ヲ上膊ト體ノ間ニ支持
シ衣服等ノ併挿セサルヲ注意シ上膊ヲ體ニ密
着セシメ下膊ヲ胸側ニ折曲シテ皮膚ニ間隙ナ
ク全器ヲ包擁スルヲ良シトス膣ト直腸トハ孰
ツレカ其便宜ナル部ニ就テ檢ス可シ子宮ニ於
テハ尋常ノ檢溫器ヲ子宮頸部ニ用井ルヲアリ

或ハ子宮消息子ノ形狀ニ製造セル者ヲ送入シ
テ檢スルヲアリ

視診

第一直達視診

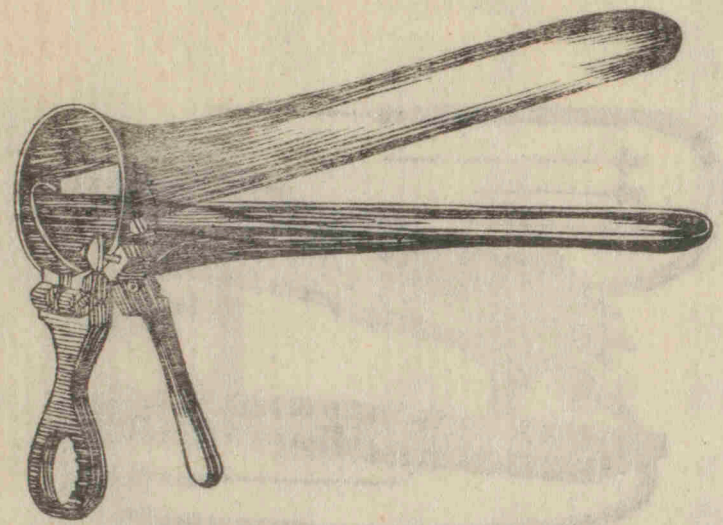
〔其一點檢〕 此レ陰門及ヒ外陰唇ニ於テ腫瘍ノ
存否ヲ檢シ尿道孔ニ於テ脈管性腫瘍等ノ有無
ヲ檢シ或ハ膣色或ハ脫下セル子宮ヲ望診スル
カ如シ

〔其二子宮鏡點檢〕 子宮鏡的檢査ヲ直達視診部
ニ算入セシ所以ハ該器ハ唯膣壁ヲ分隔擴張シ

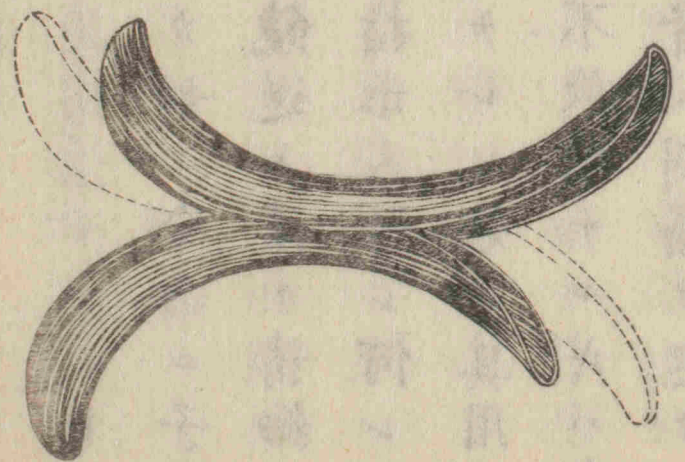
テ以テ子宮頸ノ腔部ヲ點檢スルニ過キサレハ
ナリ此器械ノ種類ハ甚タ夥多ニシテ單ニ圓筒
ナルアリ或ハ數葉ノ開擴辦ヲ有スルアリ「エル
グツソ」氏ノ子宮鏡ハ硝子筒ニシテ尖端ハ斜
截シ外面ハ破壞預防ノ為メニ銀ヲ鍍シ最モ簡
便ニシテ須要ノ良器ナリ「マリオン」氏ノ
鴨嘴狀子宮鏡ハ子宮及ヒ腔内手術ニ於テ甚タ
緊要タリト雖モ一介者ヲ得サレハ之ヲ使用シ
難シ「ドクトル」氏ノ子宮鏡ハ能ク腔壁
ヲ顯出ス其他「子ウゲバウエル」氏ノ子宮鏡ノ如

キハ送入容易ニシテ子宮頸部ヲ擴開シテ點檢
ニ便ナリ其他器械數種アリト雖モ子宮頸及ヒ
其周圍盲囊ノ最モ廣キ部分ノ點檢ヲ得ヘキハ
「ドクトル」氏ノ擴張子宮鏡ト
稱スル新鏡ノミ又觸感ト共ニ視診ヲナシ得ヘ
キ器械ニシテ最モ善良ナルモノハ同氏ノ有窓
子宮鏡ナリ假令ハ顆粒性炎ノ如キ症ニ於テ先
ツ手指ヲ觸レテ其所在ヲ知り而シテ後チ此器ヲ
用フルキハ明カニ之ヲ點檢シ得ヘシ

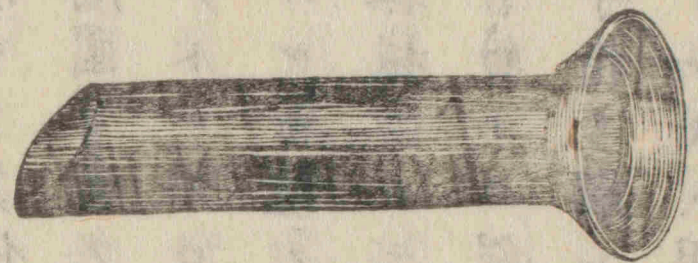
鏡宮子氏「コスク」



鏡宮子氏「ルエウバダウネ」



鏡宮子氏「シソツグル」



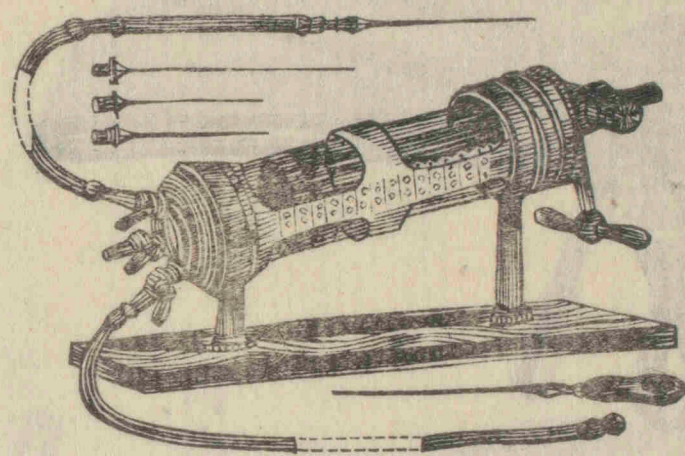
同氏 壓排器



シムス氏子宮鏡



器液洩氏「イ」ホラ「エ」



前章子宮消息子ヲ
論述スルニ方ツテ
其用法ヲ説明セシ
カ如ク今茲ニ子宮
鏡送入法ヲ精細ニ
指示ス可レ何ント
ナレハ若シ其用法
不熟煉ナルキハ患
者ニ劇痛ヲ起サシ
ムル「ア」レハナリ

患者位置

我カ米國ニ於テハ側卧ヲ以テ良法
ト為スカ故ニ仰卧ニ就テハ唯左ノ數言ヲ以テ
足レリトス即チ仰卧セシムルキハ能ク子宮頸
ヲ露呈ス時トレテハ此位置ヲ要スル「ア」リ

側卧法

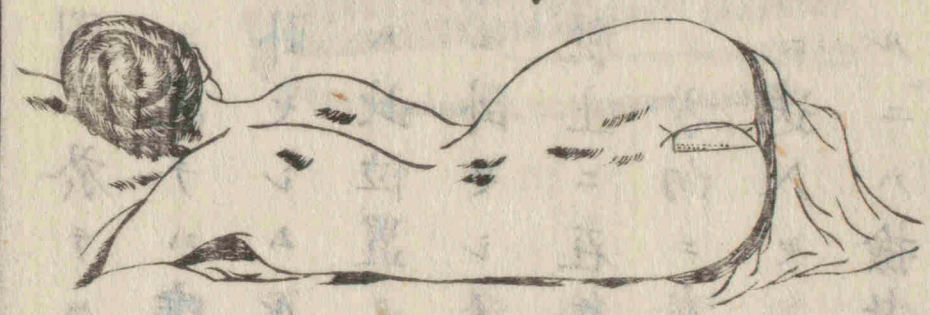
尋常左側ニ卧セシメ其膝ヲ上舉シ頭
部及ヒ肩胛ハ共ニ枕上ニ在テ肩ノ平面卧床ニ
直角ナルキハ臀部ノ方向ニ脊推ノ傾斜スル「
僅少ナリ故ニ腔内ニ送入セシ子宮鏡ハ上方ニ
向キ上部ヲ點檢スルニハ檢者頭ヲ下スヲ要シ
且ツ鏡中ヨリ藥液ヲ注キテ一時其貯留ヲ要ス

ルキハ甚タ不便ナリ尚ホ其詳細ハ後條ニ掲載ス

第 四 圖



第 四 圖



イハ尋常ノ側臥
ニテ骨盤ノ
位置ノ子宮
腔ヲ水ニ保
持セラル所ヲ示ス
ハマルリヲ示シ
ムス氏ノ半俯
ノ位置ニテ子
宮ノ位置ヲ下
傾斜ヲ示ス骨
位置ヲ示ス又
宮鏡ノ底面ニ
ル液ノ貯溜ス
所ヲ示ス

最モ善良ナル位置ハ「マリオン」氏ノ半俯

卧ト稱スル卧法ニシテ此法ハ枕ヲ與ヘスシテ

平坦ニ左側卧セシメ左肩ヲ後方ニ向ケ左手ヲ

脊後ニ折曲シ右手ノ前方ニ投シテ卧床縁ヲ把

ラシム而シテ腕骨ヲシテ卧床ニ直角ナラシムル

ハ胸部ハ殆ント斜面トナル可成の脊推ヲ内

方ニ彎曲セシメテ胸部ノ卧床ニ接スルヲ平坦

ナルヲ要ス可シ如斯スルキハ臀ハ自カラ舉上

シ腔ノ方向ハ外部ヨリ内下方ノ斜面ヲ為ス可

シ而シテ内臓ハ重力ニ因テ卧床ニ向テ墮下シ子

宮ハ近傍ノ壓力ヲ除カレ最モ容易ニ點檢シ得ヘキナリ

「五」ルゴソシ氏ノ子宮鏡ヲ送入スルニ當テ直チニ斜截端ヲ陰唇ニ向ケテ送入ス可ラス何トナレハ患者甚タ痛楚アリ故ニ之ヲ簡易ニ且ツ疼痛ヲ覺ヘスレテ送入セント欲セハ先ツ子宮鏡ニ油ヲ塗布シ右手ノ示指ヲ腔ノ後縫結部ニ送入シ次テ中指ヲ其前部ニ加ヘ而シテ其兩指ヲ少ク右方ニ轉廻シテ陰門ノ縦口ニ直角ナラシメ會陰ヲ後方ニ壓シテ少クニ指ヲ分隔ス可シ而

ノ子宮鏡ヲ左手ニ把リ右腕骨部ヨリ二指ノ間ヲ沿フテ徐々ニ送入ス可シ如斯スルキハ決シテ疼痛ヲ来スナシ而シテ殆ント二「イン」チ許送入セシキ斜截端ヲ前方ニ全筒ヲ後方ニ向ケテ腔ノ後壁ニ沿フテ送入ス可シ然ルキハ自然子宮頸ヲ顯出ス可シ若シ子宮變位ノ為メ顯出シ能ハサルキハ少ク子宮鏡ヲ轉廻ス可シ然リト雖モ猶ホ未タ顯出セサルキハ消息子ヲ子宮孔内ニ送り頸ヲ子宮鏡ノ中心ニ来レテ以テ點檢ス可シ如斯尋常ノ送入手法ヲ詳細ニ説述セシ所

以ハ若シ送入不熟煉ナルキハ患者ノ信ヲ失シ
以後ノ點檢ヲ嫌忌スルノ甚シキニ至ルヲアレ
ハナリ

子宮鏡ハ觸診ヲ確證スルノ器械ナルカ故ニ婦
人科ニ於テ觸診ヨリ至要ナリト云フニアラス
然リト雖モ亦藥劑ヲ用ヰル一箇ノ導管トシテ
最モ緊要ノ者トス
照竇鏡ハ膀胱及ヒ子宮内部ヲ點檢スルノ器械
ナリ又「ラザロヒツチ」氏ノ工夫ニ係ル一器械ハ
暗室ニ於テ骨盤内ニ電氣ノ光線ヲ通シ其竄透

セル光線ニ因テ骨盤内腫瘍含有物ノ流動タル
カ將タ固形タルカヲ鑑定シ得ヘシ洩液器ハ腫
瘍ノ含蓄液ヲ導出シテ以テ其何性ナルヤヲ診
斷スルカ為メニ使用スル者ナリ故ニ直達視診
中ニ算入ス

〔註〕洩液器ハ初メ余カ家父ノ發明ニ係ルモノ
ニシテ千八百六十八年「メーヤー」及ヒ「メルザ」
氏ニ命シテ自己ノ發明セル洩液器ヲ作ラシ
メ之ヲ携ヘ巴里府ニ至リ器械師ノ「ロベルト」
氏ニ示セリ後チ「デュ」ラホーイ氏該器ヲ「ロベ

ルト氏ニ命シテ製造セシメ己カ發明者タル
ヲヲ世ニ公布シタルカ故ニ終ニ同氏ノ發明
ニ歸シタリ

第二廻達視診

〔顯微鏡〕該器ハ子宮ヨリ除去セル病の新生物
洩液器或ハ套管針ヲ用井テ導出セル液或ハ腔
及ヒ子宮分泌物ノ何性タルカヲ診斷スルカ為
メニ使用スル所ノ器械ナルカ故ニ廻達視診器
トス

聽診

第一廻達聽診

成音

〔第一血行〕聽胸器ハ廻達聽診ニシテ胎兒心臟

ノ血行子宮血行疑妊症ニ於ケル胎盤ノ血行纖
維腫ニ於ケル血行ノ騷鳴卵巢水腫ニ於ケル血
行欠亡ノ如キヲ診斷セシカ為メ腹部ニ貼レテ
以テ聽取スル所ノ器械ナリ
〔捻髮音〕腹部腫瘍ノ癒着アルカハ屢腹壁ニ於
テ捻髮音ヲ聽取スルヲアルヲ以テ診斷シ得ヘ

第二直達聽診

發音

打診ニ直達廻達ノ二様アリ而ノ尋常廻達打診
ヲ使用ス其良法ハ左手ノ中指ヲ或ハ輕ク或ハ
強ク腹面ニ置キ右手ノ中指ヲ以テ其第二指骨
ヲ銳ク且ツ亮カニ敲打ス可シ然ルルハ其發音
ニ由テ空氣音固形音或ハ流動音所在ノ深淺ヲ
診斷ス可キナリ

簡明婦人病論卷之一畢

